

# 越前立石浦に於ける酒井忠勝公の生祠

文學博士 加藤 玄智

山口安固の著仰景録（明和二年一七六五）を讀んで、越前敦賀郡松原村立石浦に若狹藩主空印公酒井忠勝（天正十五年一五八七生—寛文二年一六六二死）の生祠があることを知つた。然し仰景録には生祠創建の年時が明記して無いのを遺憾に思つて居た。そこでどうかそれを確めたいものだと心懸けて居つた時、昭和九年三月越前常宮の神主宮本佐太氏は、偶然にも又突然余に一書を寄せて、

陳ば先年我村内（○松）立石（常宮より三里）村社八阪神社末社に

國主大明神

と稱し奉祀中の神璽を拜觀せしに、別紙の通り、板に記し有之、區の古老は曰く

昔當區に大災難（津浪又は饑饉とも云）有之、其當時窮乏悲惨なりしを、國主若狹領主（○即ち酒井忠勝公）村民を救助せられたる鴻恩に感激し、建設奉祀せり

と。若しや生祠にては非ざるか、御參考迄に、御報申上候。

と云つてよこされた。是れ余が多年その真相を知らんと欲して、而も文献の十分徴す可きものを缺き、弱つて居つた

越前立石浦に於ける酒井忠勝公の生祠（加藤）

前記酒井忠勝公の立石浦に於ける生祠の報告では無いか。生祠研究者としての余の歡喜何にか之れに若かんやである。

宮本佐太君の以上書信は、山口安固の仰景録に所謂

敦賀郡立石浦にも、忠勝様を生土神に祀り有之候。是は右村に、屹度生土神も御座なく候に付、生土神有之可然と、村中相談仕候處、老人共申候は、此浦亡所に及ぶべき處、殿様の思召にてケ様に相立居候。然れば生土神は、置きも直さず、殿様にて候と申候て、夫より祠を建て、讃岐大明神（○現存の神璽は國主大明神）と稱し奉り、生土神に祀り候。

ケ様の儀にて、御仁惠深く民に及び、下々迄感化仕事恐察すべし（○酒井忠勝は讃岐守と稱す。新井白石著藩翰譜第一、一七三）を裏書きしてをるものである。之れで彼此相總合して、立石浦の小祠は酒井忠勝公の生祠であらうと粗ぼ見當は附いた。

然かのみならず、宮本神主の寫して送られた神璽の裏書から、判斷するに、この八阪神社の末社である國主大明神祠は、明曆二年（一六五六）四月十六日に創立されたと判定して差支無い様である。而て明曆二年と云ふ年は、以上の藩翰譜に據れば酒井忠勝公の致仕された年である。故に村民藩公の盛徳を感歎し、その隱居された年を以て、生祠を創立したものと見て、先づ差支無からうと思ふ。斯様に見てくれれば本社が酒井忠勝公の生祠であつて、明曆二年の創立に成り、公の薨去の年寛文二年を去ること七年に當るのである。故にそれがまがふ方無く酒井忠勝公存命中の神社即ち生祠であることは明かである。

今宮本神主が書き抜いて郵送された神璽（檜箱中に在つて、御札の縦九寸、横五寸二分）の表裏の文は左の通りで

南閩浮提大日本若州小濱

祈所

御武運長久  
諸災消除  
延命如意

謹言

空印公御城主御代々

表

裏

明曆二申年 寶曆六丙子年迄百一年成  
四月十六日 葺替同年九月初五日終ル

### 國主大明神宮創造

移地本宮再建成就者  
安政二乙卯年五月七日終ル

明曆二申年ヨリ

安政二卯年迄

空印公二百年御祭禮相祭ル成

越前立石浦に於ける酒井忠勝公の生祠 (加藤)

ある。

尙越えて昭和九年八月一日附を以て、宮本神主は、更に同神璽表裏文面の寫眞及び該生祠の寫眞を郵送された。重ね重ね同君の好意を深謝する。左に掲げる寫眞は即ちそれである。

立石浦に建つた酒井忠勝公の生祠の外、公には尙もう一個所生祠が有つた様に、山口安固の仰景録には、記されてをる。即ち彼が、

下中郡新瀧谷村は、忠勝公思召を以て、開發の村故、小祠を建て、讚岐權現様と稱し奉り、村の生土神に祀候。と云つてをるものは、則ちそれである。これも決して忠勝公死後の祠では無く、公の存命中に成つた神社であつたことは上記山口安固の文からも想像されるのであるが、惜いことには、山口安固は、同神祠創立の年月を記して居らないから、判然せぬのである。宮本神主の擧に習つて、神璽、棟札などの記載から、之れも公の生祠であることが立證されれば、獨り學問の爲めばかりで無く、賢君名將の遺徳顯揚の一助にもなると思ひ、斯る立證の擧がる日を屈指相待つ次第である（完）

鮮北雜詠

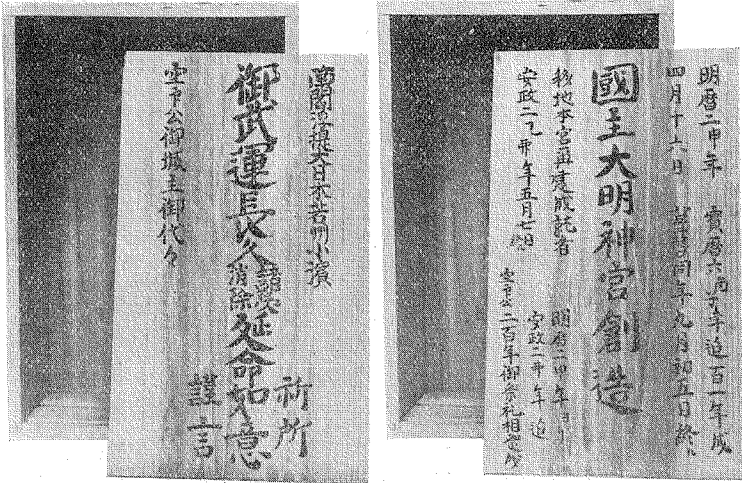
奥藤多藏

鮮北の平和の里は山青し

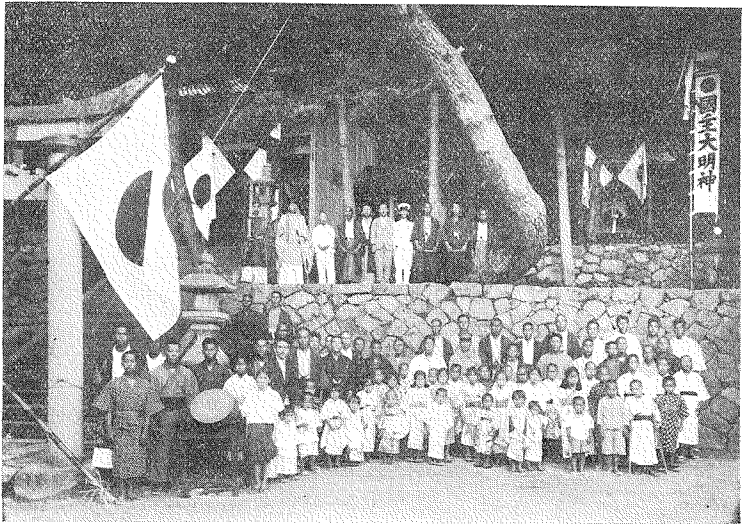
阿里なれや浮ぶ筏は屋形あり

眞寫靈神宮神明大主國祠生公勝忠井酒

越前立石浦に於ける酒井忠勝公の生祠（加藤）



典祭年八和昭宮同



（贈寄氏太佐本宮月三年九和昭）

兩村伊藤逸彦先生行狀

先生諱逸彦字民卿、號兩村樵史、其先某本州多知郡人、……先生以寬政丙辰生、文政中遊學江戸、入昌平、學業就、飯國下帷浪越……先生家世里正、……及先生時賑恤之學比年不絕、……先生之顯於事業者不遑枚舉、天保二年藩令許稱姓氏、九年許帶刀、酬其功勞也、……安政己未七月以病歿、時年六十四、其教導子弟、循々不倦……以故四方來學者甚多、欽慕之餘、遂相謀建碑於兩村山、以比生祠焉、山距先生居一里弱、每風景、必携門生、登其頂、諷詠至夕、其號蓋取諸茲山以自命也……。

安政七年龍集庚申春二月上浣

晚成 松本衡拜撰並書

昭和十年四月千葉縣神職高秀雄氏附記に曰く

二月は先生歿後八ヶ月目なり。七月十五日昇天せられたれど、二村山へ生祠の碑を建てたる三月十五日を以つて命日と遺言したるを以て、思構を急ぎ、三月以前に清書したるもの……。

# 王堂子翁の逝去を悼む

立教大學教授 岡倉由三郎

會員 舊友 Jステワート

會員 舊友 G・Bサンソム

東京帝大名譽教授 Basil Hall Chamberlain

——日本研究の先覺——

東京帝國大學名譽教授バシル・ホール・チエムバレン氏は昭和十年（一九三五）十五日スイスで死去した、享年八十五

氏は弘化三年（一八五〇）の生れで明治十九年（一八八六）東京帝大文科に博言學教師として招聘され爾來日本語並に日本に關する多數の著述をなして日本を世界に紹介するに與つて力あり殊に古事記の英譯、英文日本旅行案内、日本語文典、ローマ字日本語讀本などはよく人の知るところである。明治二十三年（一八九〇）病を得て歸國したが、明治四十四年（一九一一）日本在任中の功により勳三等瑞寶章を賜はつた。